

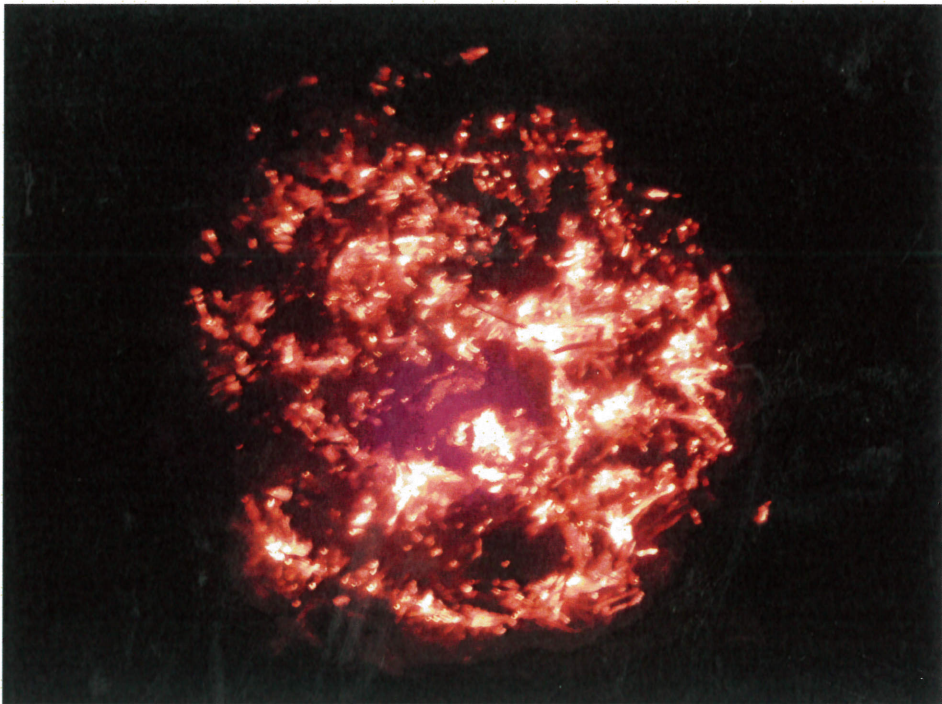
先駆 1974 年 12 月 20 日 第 3 種郵便認可  
2021 年 5 月号  
4 月 25 日発行(通巻 996 号)  
毎月 1 回 25 日発行

月刊

# 先 駆

2021 5 月  
996 号

- ◆ミャンマー国軍の暴虐糾弾—日本政府は国軍制裁へ行動を
- ◆気候危機と「地球の限界」—グローバル・コモンズを引き継ぐために
- ◆宝塚市長選、山崎さん勝利—市民・野党が総力で支える



The Front-League for Socialism, Japan  
フロント [社会主義同盟]

# 機関紙『先駆』異例の発行停止

『先駆』編集部

機関紙『先駆』の歴史を振り返る上で、未だ空白となつてゐる時期があつたことを記憶してゐる人は少ない。1972年2月28日付の『先駆』256号が発行され、次の号にあたる257号(同年10月8日付)が発行されるまで8カ月近い空白がある。それまで月3回(8日、18日、28日)の定期発行を続けてきた『先駆』にとっては異例の事態だ。何が起つたのか。

この72年の事態を理解するためには、70年12月に開催された統一社会主義同盟第9回全国大会に触れておく必要がある。

## 「同盟」から「党」への革命的飛躍

替え、プロレタリア独裁を担う全人民の指導階級として形成することができると(情勢と戦術に關するテーゼ)

この「情勢と戦術に關するテーゼ」を土台にして、9回大会以降、党は反軍国主義共闘の展開を始めた。「これは安保粉砕・帝国主義政府打倒のストロガンから安保粉砕・軍国主義粉砕・帝国主義政府打倒へと発展させることで、当時急速に膨張したフロントの影響力と活動家層を様々に配置し、党のもとで諸運動領域・諸戦線をつくりだし、それらの活動拠点を生み出すとした試みであつた」(フロント50周年特別号)から。

## 8中総整風運動

このために地区党建設を本格化させようとした。ここで現実とぶつかった。事件が発生した。東京都委員会下での部落差別発言と三里塚現闘団の女性差

1971年1月1日付『先駆』223号は「新年特集号」として、この9回大会決定を8面中4面を使つて網羅的に詳報してゐる。

一面見出し「全国のプロレタリアート・人民は日本共産主義革命党の旗の下に結集せよ 蜂起・ソヴェト・プロ独の大道を」本文は「年頭にあたり全人民に訴える」と題し、高田麦・日本共産主義革命党中央委員会書記長の長文論考を掲載。4、5面に日本共産主義革命党綱領全文、6面に「組織建設に關する報告」、日本共産主義革命党規約、7面に「情勢と戦術に關するテーゼ」が並ぶ。9回大会は統一社会主義同盟の最後の大会として召集され、全国委員会から「日本共産主義革命党への名称変更に關する決議」が提案され、採択された。「同盟」から「党」への革命的飛躍をかちとつた(高田書記長)とする時代局面だ。それは69年の第8回大会



別事件であつた。フロント派は差別者集団であるとの厳しい内部糾弾から始まつた。この差別事件の渦中、72年3月11日、第8回中央委員会総会(8CC)が召集される。

8CC前段に開催された中央委員会政治局会議に高田書記長文書が提起され、重苦しい討議が始まつた。

高田提起は「第8回中央委員会総会を開催するにあたり、議案の執筆が従来のような形では不可能であることにつきあたり、自らの総括をつきつめた結果、以下のような結論に達した。この提起はあまりに深刻なものであるとけとめられるならば幸いである」との書き出しで始まり、「提起の結論は日本共産主義革命党は、現在その綱領と規約に反した活動を展開しており、その責任はまず第一義的に政治局と政治局員一人一人の、徹底した日和見主義・官僚

主義・反マルクス・レーニン主義にあるということである」と続く。

8CCではこの高田提起を受けて、「政治局員並びに全中央委員の自己批判―相互批判、党員・同盟員を共産主義者として改造し、真の革命的階級を建設する」ことを決議。旧政治局員3名を解任し、新政治局の確立と中央委員会の全権限を新政治局に委譲することを決めた。「学生運動の指導層は中途半端で徹底しないインテリゲンチヤ的な体質があり、このブルジョア・インテリゲンチヤ的個人主義との闘争こそ、党の革命的飛躍の核心である。党のポルシェヴィキ的改造をかちとれ」(8CC決議)と檄を飛ばす。「8中総整風運動」の発動である。

「3月16日指令」で新政治局は「党の根本的改造こそが第一義的任務であることを確認し」現在の反軍国主義青年共闘の運動

で「階級闘争の革命的局面」への認識から急進路線に転換した延長線上の一つの帰結であつた。

「1967年以降、日本階級闘争の新たな段階をもたらした。プロレタリア的要素が党的に打ち鍛えられて本格的な革命の高揚が準備されていく局面である。このような局面にあつては、マルクス・レーニン主義を復権した革命綱領をもつた党を抜きにしてはプロレタリアートの闘いの発展はありえない。国家権力をめぐる全人民的政治闘争へと動員し、個々の戦線の闘争を革命的大衆闘争として貫き、すべての戦線をプロレタリア独裁のための戦線へとつくり

については凍結」を指示。同盟内で発生する差別言動は、基本的には同盟内の大衆運動主義的偏向・小ブル的体質・総体としての統社同的残滓に根拠をもつてゐるとし、差別が拡大しないように「先駆発行の停止」「同盟の対外活動の停止」を行い、整風運動を展開する。(フロント50周年特別号)

当時『先駆』が急に発行されなくなり、周辺から驚き、不安、疑問、批判が各地の同盟員に押し寄せた。同盟員は「内部の整風運動について、対外的に発言するな」と指導されたので、対応することができず、口籠つたままであつた。

## 呆気ない結末

しかしこの「8中総整風」もわずか1カ月で呆気ない結末を迎える。

突然、4月に入り、高田書記長以下8中総政治局員は「日本

## 『先駆』に望む

— 『先駆』を読んで』に替えて—

兵庫・中村 登

『先駆』を読んで』に替えて『先駆』に望む』という形で、次の3点について忌憚のない意見を述べさせていただきます。

### 1. 『先駆』の全体像について

①『先駆』の全体像(=スタイル)を一言で言えば「ちりばめられた宝石箱」である。これは良く言えば、であって、斜めに言えば「メインが見えないサブばかり」である(「何がメインか」は後で述べます)。

②発行主体であるフロント(社会主義同盟)は、社会変革(=革命)をめざすれっきとした政治的(社会的)組織である。

その機関誌が「〇〇に決起せよ！」風の、宣伝・煽動・暴露を主目的とした他組織の機関紙・誌とは全く異なった現在の全体像(=スタイル)にしているのには「明確な理由」がある(と思っている)。

③以下は、その理由についての「私流の解釈」である。

それはフロント(社会主義同盟)の革命路線が「4不(不平・不満・不安・不信)の煽り」によって革命的政治勢力を組織する政治主義から「社会を創る」ことを通して「社会を変える」社会的政治勢力を組織する社会革命(先行ないしは並行)主義に転換しているからである、と。こんな訳で私は『先駆』および編集部に拍手を送っている。

### 2. 『先駆』4月号の記事について

「新型コロナウイルス」の爆発的流行から何を学ぶべきか

「地球環境ウオッチング2021(上)」(田中俊一)

①新型コロナ関連の論評は「現代医学の力で簡単に抑えられるのに菅政権は何をしているのか？」のオンパレードである(一番ひどいのは橋下徹と『日刊ゲンダイ』である)。変異株が出てきて、ようやく世間に「これはそう簡単ではないぞ」という空気が流れ始めている。

②私が働いている訪問介護事業所の仲間(訪問ヘルパー)が新型コロナに罹り、神戸市立中央市民病院・重症者病棟に入院して1カ月である。私を含め同僚はPCR検査を受けた。菅政権云々はさておき、現実を直視すればバタバタしても始まらないのである(もちろん「菅政権への批判を控えよ」と言っているのではない)。それよりも「医療体制の再建」こそがカギを握っている、つまり「医学と医療の問題」である、と直感している。これは今日明日の問題ではない。

③このような時に表記が出てきた。これは「現実論」と「そもそも論」の問題であって田中氏は「ここは冷静になって『そもそも論』に立ち帰ることも重要だ」と主張されているように読んだ(『先駆』は以前にも「ウイルスとの共生を」の長崎大学・山本太郎氏を取り上げた)。これを左翼紙・誌が載せていることに大いに意味がある、と思う。「下」を期待する。

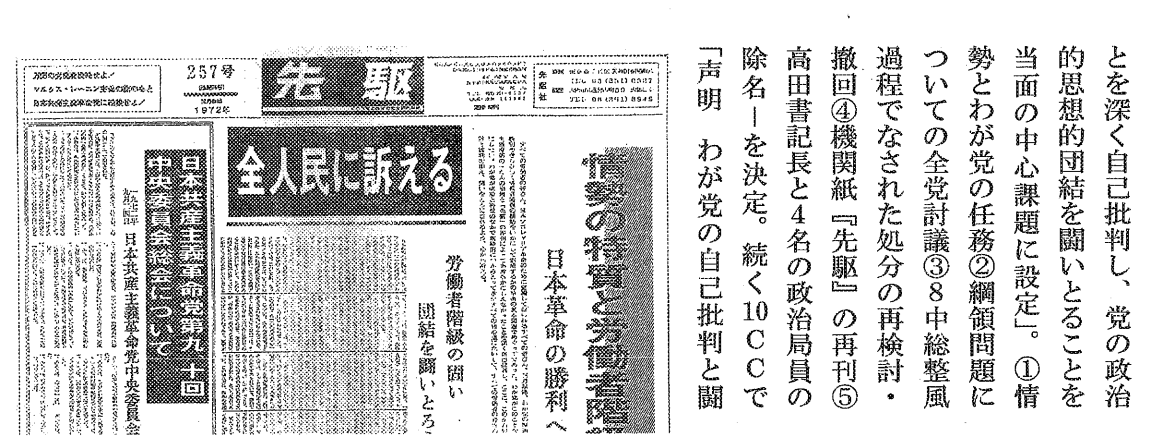
### 3. 『先駆』に望む企画について

①これはズバリ「路線論争」である。安藤紀典氏の「構造改革論」を巡る力作も「路線論争」のなかに位置づけるべきだと考えている。昨年亡くなった小寺山氏の存在もそうあるべきだ、と考えている。また、斎藤幸平の提起も含めるべきである。

②具体的な企画案は次号で。

革命の主体である労働者階級の革命的翼は日本共産党にあり、新左翼運動はフロントを含めて小ブル急進派であった。フロントを解散し、共産党に合流すべきである」との解党派に転換する。政治局全員が同盟を脱退し、指導部が空中分解する。政治局に直結していたし青同盟・学対部などから学生同盟員の脱退・細胞の解散が進行、本部との連絡がつかなくなり、各地の調査団が上京し始めた。

新潟県党から調査のため派遣された蓮沼勝男(当時中央委員)、南雲明男両氏が東京・神田の先駆社事務所を訪れると、事務所内には8CCで解任された佐々木成旧政治局員が一人在室。事態の説明が要領を得ず、高田書記長の住所を聞き出し、都内のアパートを訪ねるが、不在。数時間アパート周辺で待機するが現れず、やむなく新潟に戻る。



「何が起きたのか、内部の人間にも分からないのだから外部の人にはもっと分からないことだった。フロント内外の人たちから説明を求められても起きていた事態の全体像がつかめず、統一見解もなかった」(金高毅氏、「佐々木成追悼集」)。「東京・中部では、党員一人一人への点検、総括活動が始まり、『先駆』どころではなかった。そのうち会議も招集されなくなり、組織がなくなった状態」だったという。

こうした混乱の中で、地方組織を軸に解任された政治局員、解党に賛同しない中央委員などの再結集が始まった。再建へ7月全国協議会、8月第9回中央委員会総会、9月第10回中央委員会総会と連続して組織活動が再開された。

再開された9CCでは、「この危機が政治局の逃亡と中央委員会の指導放棄の結果であること」を自己批判した。3面で「声明 わが党の自己批判と闘いの決意」を公表、「9大会綱領の根本的反省」、「8中総整風の誤り」、「労働者階級に依拠した闘いの歪曲」、「8中総整風の脱党・逃亡」を批判的に総括、党の改造・再建の闘いへの決意を明らかにした。

革命の主体である労働者階級の革命的翼は日本共産党にあり、新左翼運動はフロントを含めて小ブル急進派であった。フロントを解党し、共産党に合流すべきである」との解党派に転換する。政治局全員が同盟を脱退し、指導部が空中分解する。政治局に直結していたし青同盟・学対部などから学生同盟員の脱退・細胞の解散が進行、本部との連絡がつかなくなり、各地の調査団が上京し始めた。

新潟県党から調査のため派遣された蓮沼勝男（当時中央委員）、南雲明男両氏が東京・神田の先駆社事務所を訪れると、事務所内には8CCで解任された佐々木成旧政治局員が一人在室。事態の説明が要領を得ず、高田書記長の住所を聞き出し、都内のアパートを訪ねるが、不在。数時間アパート周辺で待機するが現れず、やむなく新潟に戻る。

「何が起きたのか、内部の人間にも分からないのだから外部の人にはもっと分からないことだった。フロント内外の人たちから説明を求められても起きている事態の全体像がつかめず、統一見解もなかった」（金高毅氏、「佐々木成追悼集」）。「東京・中部では、党員一人一人への点検、総括活動が始まり、『先駆』どころではなかった。そのうち会議も招集されなくなり、組織がなくなった状態」だったという。

こうした混乱の中で、地方組織を軸に解任された政治局員、解党に賛同しない中央委員などの再結集が始まった。再建へ7月全国協議会、8月第9回中央委員会総会、9月第10回中央委員会総会と連続して組織活動が再開された。

再開された9CCでは、「この危機が政治局の逃亡と中央委員会の指導放棄の結果であるこ

とを深く自己批判し、党の政治的思想的団結を闘いとることを当面の中心課題に設定」。①情勢とわが党の任務②綱領問題についての全党討議③中総整風過程でなされた処分再検討・撤回④機関紙『先駆』の再刊⑤高田書記長と4名の政治局員の除名―を決定。続く10CCで「声明 わが党の自己批判と闘



いの決意」を決議した。

実に8カ月ぶりに10月8日付で『先駆』（257号）が再刊される。同再刊号では一面に「全人民に訴える」と題し、「3月以降、わが党の直面してきた危機は、日本革命の勝利を切りひらく労働者階級の団結をいかにして形成するか、革命の根本問題をめぐってであった」と総括し、労働者階級の固い団結を強調。併せて9、10回中央委員会総会決議を掲載し、「中央委員会はこの危機が政治局の逃亡と中央委員会の指導放棄の結果であることを自己批判」した。3面で「声明 わが党の自己批判と闘いの決意」を公表、「9大会綱領の根本的反省」、「8中総整風の誤り」、「労働者階級に依拠した闘いの歪曲」、「8中総政治局の脱党―逃亡」を批判的に総括、党の改造・再建の闘いへの決意を明らかにした。